岩手県立大学盛岡短期大学部研究論集第23号
Bulletin of Morioka Junior College Iwate Prefectural University, No.23
i－xii, March 2021

研究報告

折口信夫　自著を献呈する

松本博明※

一　はじめに

歌人、詩人、そして小説家。日本文学研究者にして思想家。さまざまな肩書を持つ折口信夫（釈迢空）は、文学研究においても、またその周辺学問の学史においても、もはやここで解説する必要もない偉大な先人である。しかし、彼の生涯は、その膨大な業績をその身の周辺に置きながらも、様々な伝説と時に毀誉褒貶とに彩られている。

もとより、『折口信夫全集』全三七巻、別巻四巻、さらにはそのノート編全三二巻、合わせて六二巻の業績を後世に残した[1]先人が、はじめから優れた研究者、歌人、詩人として世に知られていたはずはない。世に知られその業績が評価されるためには、当然、自らの業績や作品を世に問うための並々ならぬ努力があったはずである。

しかしながら、私たちは往々にして、こうした先人が残した偉大な業績やあるいはすぐれた作品の価値、またその年譜事項にいやおうなくまとわりついてくる伝説めいた話に惑わされ、その努力の経過を見逃しがちである。こうした努力の経緯がなかなか資料として跡付けられず、世に出たのちの弟子たちの述懐や言説が、その年譜事実をゆがめてしまうからである。

こうした状況の中で、折口信夫について言えば、伝説的言説と対抗できる膨大な実証的資料が残されている。こうした企図せずに残された膨大な資料の残存が、折口信夫の業績評価に幸運なことなのか、不幸なことなのかは別として、残された資料を正しく整理・解説・検証していくことは、後の世に生まれ、これもはからずも折口信夫の作品に出合ってその内実を研究しようと思い立った者の、責務であろう。

本稿はそうした思いに導かれながら、細々と整理を続けてきた折口信夫周辺資料の中から、特に先述した「世に出る前の折口の努力」にかかわる資料を中心に整理解読し、その一端を検討しようとするものである。

※　国際文化学科

二　『古代研究』を献呈する

折口信夫の最初の公刊論文集である『古代研究』は、昭和四年四月「民俗学篇Ⅰ」と「国文学篇」の二冊が、翌年の六月に「民俗学篇Ⅱ」一冊が刊行され、全三巻が完結した。発行所は大岡山書店。

本書の刊行意図あるいは内容については、第三巻「民俗学篇Ⅱ」の巻末に据えられた、この種の書物としては極端に長い「追ひ書き」に、まるで長大な言い訳のように書き連ねられた文章に手掛かりがある。検討のために、その内容を記述の順を追って整理しておきたい。

（1）　本書の校正が上がるときになって突然長兄進がなくなったこと。兄のかかりうどになって長いことその扶養を受けて遊民の生活を続けてきた自分（＝折口）と、先々代の実子岡本屋彦次郎とを引き比べて、文学や学問を暮らしのたつきとできる時代になって私学の教員として先生という立場になった自分を、大阪人の血がおどむ自分は決して誇ることができないと述懐する。

（2）　長兄以上に無条件で同情してくれた叔母ゑい、この人を喜ばすためにこの本を出そうと決心した事。

（3）　学問上の影響は柳田国男に拠るところが多い。本書は、柳田の「石神問答」から引き続いた長い研究から得た暗示を具体化したものであり、その学問に触れて我が行くべき道に出たこと。一道の明かりのさす道を暗示してもらったことにたいして報謝したい。

（4）　そのためには新しい国学を興すことであり、とりもなおさず古代信仰から派生した、社会人事の研究から出直さなければならないこと。本書はその筋立てを模索した痕であること。

（5）　私（＝折口）は、本書以降さらに考えの変化があり、仮説が仮説を導く研究法を続けてきたこと、そのために次々と結論を度外視した仮説を提供することを潔しとしないが、柳田の「及ぶ限りの資料を連ねて作者の説明がなくとも結論は、自然にわかる」というような方法に憧れてきた。書冊を読みながら、記憶及び記憶の下積みになった数多の知識の印象の随時の活動に頼るような読書法をするようになったこと。

（6）　資料と実感と推論とが交錯して生まれてくる論理をたどるように努めてきたため、書物を読めばその印象が実感を起こす。旅に出て、その地の民俗の刺戟に遭えば、壹斎での知識が実感化されてくること。人類学・言語学・社会学の学問で、不確実な印象記なる文献や、最小公倍数を求める統計に、絶対の価値を信じる研究態度を廃

して、比較研究において事物と事物の間の関係を、正しく痛感する態度が重要であると自覚した。

（７）遠州奥山村の芸能採訪の経験とその実感から出た、自らの類化性能の在り方について自信を持った。

（８）沖縄の島の伝承から、古代日本の姿を実感した。

（９）沖縄語と日本語の本質的な差異を見出したこと。日琉分離の時代の古いことを感じ、日琉語同族論を危ぶみだしたこと。しかし民間伝承の類似性は古代研究の力になりえることを自覚した。

（１０）金沢庄三郎と朝鮮語学習の成果。さらには律文学の文学史語り部の職掌を重野安繹氏に、ユーカラとその伝承者の存在を金田一京助氏に学び日本の語り部の想定図を作ることができた。

（１１）本書の索引を弟子の波多郁太郎が作成してくれたが、それはこの本の索引以上に効能はないだろう。

（１２）生きた生活である哲学と固定した知識である科学のとの間に、別に実感と事実との融合に立脚する新実証学風があるはずであり、それが実感である。本書の研究法においても、民俗を見聞しながら、又は本を読みながらの実感が、記憶の印象を呼び起こし論理の糸口を得たことが多い。

（１３）私（＝折口）の学問は、最初、言語に対する深い愛情から起こったものである。言語の分解を以て、民俗の考察の比較の準備に用い、言語の展開の順序を、民俗も履んでいるかを見ようになった古代生活は言語伝承にのみ保存せられているから、古代における俗間語源観を考える語源研究は民俗の考察に捨てられない方法である。今後伊波普猷氏と益々共同を積んでいく必要がある。

（１４）私（＝折口）の国語研究を疑う人には、「古代生活に現れた民族論理」を読んでもらいたい。

（１５）私（＝折口）の研究の立場は常に発生に傾いている。それが延長せられて展開を見る。国文学史、芸能史の研究にはそれが最も適しい方法だと考える。また遡源的に時代を逆に見ていく態度も交じる。

なんとも長々とした整理になったが、少々我慢をお願いしたい。筆者は『古代研究』全三巻の刊行意図を探るうえで、この「追ひ書き」がより一層検討されなければならないと考えているからだ。

この一万八千字（二〇〇字詰め原稿用紙にして九〇枚）に及ぶ膨大なあとがきを読むと、自らの研究方法への大きな気負いと、それと対比的に彼の心にある懸念と恐れとが同時に表出されていることがわかる[2]。

発生の時代とされ、文学の発生という主題が時代のトピックスになっていた大正末年から昭和初年にかけてこの本をまとめることの自負が横溢しているのだが、その方法は、「実感」という特異な、一般的にはなかなか理解、説明しがたい能力によって推し進められてきたこと、そのことに斯界の人々の理解が果たして及ぶかどうかを著しく危惧している折口の自信のなさも垣間見られる。

そのことが、折口の献呈先とどのようにリンクしていくのかを考えれば、当時の折口の志向性が際立ってくると思うのである。こうして、この気負いと懸念が、どのような形で具体化していったか、具体的にいうとこの本を折口はどのような形で誰に問おうとしたのか、それを考えるうえで重要な指針を示してくれるのが、彼の本書献呈に関わるデータである。

折口信夫関連資料のなかに、一万二千通に及ぶ受け取り書簡群があることは、今までも様々な場で発信してきた。残念ながら小生が折口博士古代研究上の研究員であったときに整理をして、その後細々とその記録をデータベースの形にしてきたが、まだ公開の許可が得られていない。これは極めて残念なことだが、しかし科研費を使ってその骨格だけでも組みあがったこのデータを今回も使いたい[3]。

さて、折口信夫受け取り書簡のＤＢを「古代研究」を検索語としてスクリーニングすると、表①のようなデータが抽出される。（巻末参照）

これを手掛かりに、折口がどのような人々に、自著を送ったかを見ていこう。もちろん、手元にあるデータは「受け取り書簡」のデータであるから、これを分析することで、直ちに献呈先の全体像が分かるわけではない。献呈を受けてもその礼状を送らない人も当然いたはずである。

しかし、仮にそうであっても、おそらくそれは僅かであって、傾向は変わらないものと考える。それを前提に本データから、折口がどのような属性の人々に送ったか（正確に言えばどのような属性の人々から謝辞が届いたかについて以下に示したい。（この属性は筆者が整えたものであるが、一般的な捉え方から分類している。複数の属性に関わりをもつ場合は重複させ、太字とした。ただ、これが当時の学の捉え方と一致するとは考えていない。あくまでも本稿執

筆のための分析装置だと心得ていただきたい。したがってそこには幾分かの恣意的な箇所もあることをお断りする）

【言語学・国語学者】**金沢庄三郎**、**金田一京助**、**北里闌**、**新村出**、山田孝雄、**安藤正次**、橋本進吉、**高野辰之**

【国文学者】

内【古代・万葉研究者】**齋藤茂吉**、**武田祐吉**、澤瀉久孝、久松潜一

【中世】**横山重**

【同期】（天王寺中学）**岩橋小弥太**、西田直二郎、**武田祐吉**、大道道雄（國學院）、秋岡保治

【国学院関係】

内【國學院学長】**服部宇之吉**、**河野省三**、**石川岩吉**

【師】**金沢庄三郎**、**金田一京助**

【同期】**武田祐吉**、**岩橋小弥太**、**高野辰之**

【弟子】岩松文弥、高安周吉、井上道弘

【同僚】小林秀雄

【神道学者・神官】柳瀬福市、土師東人、宮地直一、神崎一作、**河野省三**

【民族・民俗学者】**柳田国男**、渋沢敬三（アチック）・中山太郎[4]、**松本信廣**、**宮本勢助**、宇野円空、**胡桃沢勘内**（信濃）、**早川孝太郎**（全芸能）、**島袋源一郎**、**伊波普猷**、**川平朝英**（沖縄）

内【民族・民俗学会】**松本信廣**、**宮本勢助**、**渋沢敬三**、**早川孝太郎**

【木曜会・民間伝承の会】**柳田国男**、

【沖縄・南島談話会】**島袋源一郎**、**伊波普猷**、**川平朝英**、**新村出**、**金田一京助**、**松本信廣**、**移川子之蔵**、**幣原担**、**北里闌**、**渋沢敬三**、**山本太郎**、**山本実彦**

【信州】**胡桃沢勘内**、**早川孝太郎**

【歴史学者】**岩橋小弥太**（同窓）、入田整三（金石文・古代史）、滝川正次郎、三浦周行（法制史）、石田幹之助（東洋文庫設立）、平泉澄（日本中世史）、高橋誠一郎（経済史）、澤木四方吉

【哲学・思想学】和辻哲郎、津田左右吉、土田杏村

【書肆】**横山重**（**大岡山書店社友**）、山本実彦（改造社社長）

【歌人】土岐善麿、**斎藤茂吉**

【詩人】室生犀星、日夏耿之介

【教え子】波多郁太郎

【血縁親族】折口あぬ（叔母）、折口和夫（末弟）

【その他】岡村要蔵（地質学）、林毅陸（慶應）

（太字は他の属性と重複するもの）

一覧表を見て言えることは、『古代研究』の献呈先に大きな偏りが見られることである。国語学者が八名。このうち金沢庄三郎と金田一京助は國學院大學の師であるから除いても、少なくとも六名の国語学者に献呈されている。

このことは、民俗学者が柳田国男を含めても五名、古代文学研究者が「アララギ」で論争を行い「アララギ」を去る原因ともなった歌人斎藤茂吉、天王寺中学で同窓の武田祐吉を含めて久松潜一、澤瀉久孝を加えた四名であることを考慮すると、突出していると言える。というより、折口には国語学者にこそ本書を送ったとみることができるのである。

八名の国語学者は、現在ではもはや大家ともいえる斯界の重鎮であるが、その基本データと『古代研究』が献呈された昭和四・五年前後の状況を確認しておこう。

北里　闌（一八七〇～一九六〇） 北里柴三郎の弟。古代日本語音韻学。台湾総督府蕃類調査団の一員として台湾調査に同行。一九二〇（T九）には柳田国男とともに琉球調査を行う。この沖縄採訪での柳田の採訪記を聞き、折口信夫が琉球採訪を決断し、翌大正十年に沖縄採訪が実現した。

金沢庄三郎（一八七二～一九六七） 一九〇〇年東京外国語学校韓国語科教授、一九〇二年東京帝国大学博言科朝鮮語講師。一九〇七年ころ、國學院大學大学生の折口信夫、岩橋小弥太、小倉進平、後藤朝太郎らに『広辞苑』の編纂を手伝わせる。一九〇二年『日韓語動詞論』『日韓両国語比較論』で学位。一九一〇年『日韓両国語同系論』一九二九年「日鮮同祖論」を出版。折口信夫が卒業研究「言語情調論」を執筆するにあたり、金沢の影響を大きく受けたことはよく知られる。また、折口が一九一四年、「言語学研究のために」上京し、赤門前の昇平館に下宿した際、大阪から大挙して追ってきた生徒の生活を見るために困窮した折口に『中等国語読本教科書用参考書』の編纂を委託し、折口の困窮を救った。

山田孝雄（一八七五～一九五八） 『中等教育　国語沿革大要』（一九〇八）『奈良朝文法史』（一九一三）『平安朝文法史』（同）『日本文法講義』（一九二三）『日本口語法講義』（同）『敬語法の研究』（一九二七）『仮名遣の歴史』（一九二九）『古代の語法』（一九三〇）

高野辰之（一八七六～一九四七） 長野県訓導を経て、東京帝国大学国語研究室にて上田万年に師事。（一八九八）。文部省国語教科書編纂委員（一九〇二）、東京音楽学校教授（一九一〇）、

國學院大学講師（一九二三）。昭和四・五年前後の動向は、『日本民謡の研究』（一九二四）『日本演劇の研究』（一九二六）『日本歌謡史』（一九二六）『歌舞演劇講話』（一九二九）など。

新村出（一八七六～一九六七） 静岡中学、第一高等学校、東京帝大にて上田万年に師事。一九〇二年に東京高等師範学校教授、一九〇四年東京帝大助教授。英独仏留学後、一九〇七年京都帝国大学助教授。後教授。昭和四・五年前後は、『南蛮更紗』（一九二四年）『典籍叢談』岡書院（一九二五）『南蛮廣記』（一九二五）『続 南蛮廣記』（一九二五）『東方言語史叢考』（一九二七年）「東亜語源誌」（一九三〇）などを出版し、南島言語の研究に興味を示していた。大正十一年四月二十一日、一ツ橋如水会館で開かれた南島談話会に出席。

安藤正次（一八七八～一九五二） 皇學館本科から東京帝国大学文科大学専科卒業後、皇學館教授となる。一九一六年、文部省から国語に関する調査を委嘱される。一九二八年台北帝国大学教授。『日本文化史』第一巻古代（一九二二）、『古代国語の研究』（一九二四）『小さい国語学』（一九二四）『言語学概論』（一九二七）。

金田一京助（一八八二～一九七一） 一九二二（大正十一）年國學院大學教授。一九二八（昭和三）年東京帝国大学助教授。一九三一（昭和六）年、岡書院岡茂雄の再三の勧めによって『ユーカラの研究：アイヌ叙事詩Ⅰ・Ⅱ』が刊行される。國學院大學に置ける師であり同僚。大正十一年の南島談話会に出席。

橋本進吉（一八八二～一九四五） 言語学者、国語学者。日本語における音韻史の先駆者。時代仮名遣いを体系づけた。第三高等学校を経て、一九〇六年東京帝国大学文科大学言語学科卒。一九二七年東京帝国大学助教授。一九二九年教授。昭和一〇年に折口信夫、高木武とともに有斐閣から『国語国文講座』第十五巻を編著。

これら八名の国語学者のうち新村、金田一の二名は南島談話会の会員として参画している。また、北里は大正九年の柳田に伴われて沖縄採訪団に同行しており、この採訪についての話をする予定の一ツ橋如水会館での南島談話会にも出席していた。(5)

折口の『古代研究』献呈先に多くの国語学者が選ばれていることの理由について、まず挙げられるのは、彼の「追ひ書き」にしばしば記される国語学への志向性である。先ほど整理した『古代研究』「追ひ書き」の（13）（14）の記述がこのことと符合する。さらに当時の国語学者の多くが、南島、北方、朝鮮といった日本周辺言語との比較研究に強い興味を示しており、上田万年をはじめとして、ここに挙げた北里、金田一、新村の三人が柳田の南島談話会に出席していることから、ここに「追ひ書き」の（8）（9）（10）の記述と密接に関わる側面（つまり南島への志向）が見えてくるのである。

折口信夫が國學院に入った直後から、毎週のように東京外国語大学の夜学に通い、金沢庄三郎の「朝鮮語」の講義であったという事実、金田一京助のユーカラに特別の興味を示し、岡書院の岡正雄を通じて刊行を急がせたという事実、さらには琉球語と日本語との関係を理解するために、柳田からの刺戟にいち早く応え、「沖縄語と日本語の本質的な差異を見出したこと。日琉分離の時代の古いことを感じ、日琉語同族論を危ぶみだしたこと。しかし民間伝承の類似性は古代研究の力になりえることを発見した」沖縄での実見に対する「追ひ書き」の記述を考えると、『古代研究』の当初の目的は、日本周辺の関連言語との比較研究を、古代文学というフィールドで考察しようとしていたことがわかってくるのである。しかしその場合でも、『古代研究』が、文献学的アプローチや語釈解釈のみに往生している当時の万葉学者や古代文学研究者に贈られた形跡はないところに、彼の「追ひ書き」（12）（13）の言説が響いてくることになるだろう。『古代研究』は明らかに国語学、言語学の書として世に問いたかったものと言える。(6)

さらに、献呈先の傾向を探って行くと、津田左右吉、和辻哲郎、土田杏村といった思想史や哲学者、さらには金石文の専門家入田整三、古代法制史の三浦周行、経済史の高橋誠一郎といった古代をフィールドとしながらも幅広い分野に渡っている。

この時代は、学問研究が現在のように細分化しておらず、それぞれの垣根は非常に低く分野別の交流が頻繁に行われた。例えば国語学における「南島、北方、朝鮮」といったようなフィールドの交錯が容易に可能だった時代であるため、こうした幅広い分野への目配りが十分に可能だったことと思われる。しかし、『古代研究』はいわば折口の処女論文集であり、折口としては相応の自負を以て斯界に送り出したに違いない。その対象が、国語学、言語学に偏っていることは、『古代研究』の性格を検討する上で留意すべきことだと考える。國學院大學が、『古代研究』のうち万葉集に関わる論考に学位（文學博士）を与えたというのも、折口にとってみれば、いささか的外れに映ったかもしれない。

もう一つ、本書が横山重を通じて大岡山書店から出版したこと、さらには横山が仲立ちして、大岡山書店から本書が各贈呈先に送られていたことがわかる資料がある。

昭和四年四月二十七日消印の横山重の書簡には、「徐々に発送してゐます。朝日・中山さん、日日・金田一さん」というような記述があり、書評依頼のために大岡山書店から横山が各書評者に発送していたことがわかる。

三　『春のことぶれ』を献呈する

折口信夫（釈迢空）の第二歌集『春のことぶれ』は、昭和五年一月、梓書房から刊行された。箱入り変形菊版（一六〇×二〇〇・二）、黒紫色のクロス装、クロスは結城紬を使用し本歌集のために特別に織らせた。背の標題、名前と表表紙に刻印された鬼の絵に金箔が押されている。天金仕上げ。総頁二三六頁、定価は二円八十銭であった。

大正十四年から昭和四年に至るまでの短歌五〇一首を編年体で収める。歌集の扉には「我がまをす　春のことぶれ　聴きたまへ」から始まる長歌が印刷されており、その冒頭部から歌集の題名が採られた。

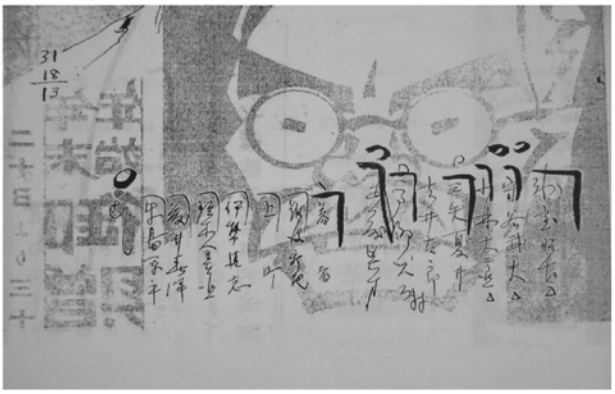
池田弥三郎によれば、この『春のことぶれ』を刊行した頃が「折口の生涯で最も幸福な時代」だとする。(7) 昭和五年一月と言えば、前年四月に『古代研究』第一巻、第二巻を刊行、順調な滑り出しをし、さらに第三巻の完結を目指していたころである。

その五年前に、折口は第一歌集『海やまのあひだ』を改造社から出版しているが、その第一歌集のあとがきである「この集のするに」もまた、歌集のあとがきしては極端に長いものである七五一八字、二〇〇字詰めの原稿用紙にして三十八枚弱。文学研究と文学創作との間に挟まれて「学者なかまに立ちまじると、文学者肌が、目立つた。文学者の群れにゆくと、あまり著しく、自在を失うた、学究臭さが、省みられ（中略）私は永く中道に悶えて居た」こうした苦悩のなか、三矢重松に出会って、自ら作る作品が国学の究極地として褒められたこと、さらには柳田国男と出会うことによって、水火の中道に行くべき百道を見出して、そこを進んでいることを感慨深く記述する。どちらへ軸足を移すか悩みながら、しかしそのどちらへも軸足を移すことなく進むことのできたことに、ここでも重ね重ね報謝するのである。

また、『海やまのあひだ』では、歌に句読点あるいは一字開けなどの表記に工夫を凝らした新たな句読法を採用しているのだが、その理由として五七五七七に固定しがちな歌の様式を自由な推移に導く予期として、自在なる歌の詩形の発生として、試みたものだ、とまるで言い訳のように記述するのである。

このような『海やまのあひだ』における「おぼつかなさ」に対して、『春のことぶれ』の実に堂々としたことか。前歌集において句読点字あけが、表記上の試みに過ぎなかったものが、『春のことぶれ』では、句読点を入れたまま、三行ないしは四行分かち書きという冒険的な表記法を採用している。しかも、前歌集巻末に長々と書き連ねられていた「あとがき」は一行もない。巻末には「作歌年表」のみが付されている。このことは、本歌集に掲載された大正十四年から昭和四年にかけての歌に関して、折口は相当の自信を抱いていたということがわかる。

それが証左に、本歌集の贈呈に関しては、折口信夫自身が献呈作業に濃密に関与していたことを示す資料が残されている。それは折口自筆の献呈先メモ及びその清書、さらには献呈先を記した郵便受領証とである。（参考資料　表②・③を参照）



図①　上　郵便物受領証（大井局　昭和５年１月27日）
図②　下　折口自筆の献呈先メモ（一部）

自筆の献呈先メモは四点、清書紙は二枚、郵便物受領証は大井町局と神田駿河台局の二局から発せられたもので七枚残されている。受領消印は一月二七日から三月一〇日までとなっている。これらを見る限りにおいては、反古紙に折口が自筆で宛先を書き、それを恐らくは鈴木金太郎が清書し、その宛先に向けて発送したものと思われる。

献呈に折口自ら関わり、さらには送り先を念入りに吟味していることがうかがい知れる。この資料を基に、どのような人に『春のことぶれ』を献呈したのかについて検証してみたい。

【古代研究と重複】

【師】金田一京助、

【同級・友人】岩橋小弥太、武田祐吉（天王寺中学）、北野博美

【研究者】

【文学】久松潜一（古代文学）、横山重

【民族・民俗】中山太郎、早川孝太郎、伊波普猷

【歴史】澤木四方吉（西洋美術史・慶応）、石田幹之助
【思想哲學】土田杏村（思想・哲学）
【弟子・教え子】牛島軍平
【歌人・詩人】土田杏村（口語自由短歌）、斎藤茂吉、土岐善麿、日夏耿之介、室生犀星
【書肆】山本実彦、岡村千秋（博文館・郷土研究社）
【親族】折口るい

【新規】
【師】石丸梧平、三矢夏井（三矢重松息）
【同級・友人】西田直二郎、永瀬七三郎、羽田清光（宮内省式部職賞典補）
【國學院】高柳公寿
【慶應】小島政二郎、
【弟子・教え子】安藤英方、伊原宇三郎
【歌人・俳人】北原白秋、川田順、吉井太郎、土屋文明、石原純、吉植庄亮、前田洋二、吉井太郎、吉井勇、下村海南（朝日新聞）中村憲吉、杉浦翠子、石原純、前田夕暮
【小説翻訳】小泉鉄
【神職・神道】氷室昭長・林五助（神道大教第六代目館長・歌人）

当然のことながら、歌人俳人への献呈が多い。なかでも、『古代研究』に引き続いて『春のことぶれ』が送られた人々は、「研究と創作」という二つのはざまに苦悩していた折口にとって、極めて大切な読み手として意識されていたことは確実に言えそうだ。それの名前をたどってみれば、昭和四・五年前後の、折口の斯界を見るまなざしの質や方向が見えてくるだろう。しかし、残念ながら紙幅が切れた。本テーマはさらに詳細に検証していくつもりである。

注

（1）新編集決定版『折口信夫全集』（中央公論社）は当初本編三七巻、別巻四巻、合計宇四一巻が刊行される予定であったが、最終巻の写真集が刊行されないまま刊行が終了した。最終巻の写真集については、『精選　折口信夫』vi（二〇一九、慶應義塾大学出版会）に、「アルバム」として刊行された。今後異なる形で刊行が望まれる。

（2）加筆校正刷りが現存する（國學院大學蔵）。全頁にわたって書き込みがされており、この「追ひ書き」に対する折口の並々ならぬこだわりが感じられる。

（3）「折口信夫受け取り書簡データベース」（仮称）は、筆者が二十三年前、折口博士記念古代研究所を退職するまでほぼ八年間の間に分類調査した折口信夫にあてた書簡群である。その後少しずつデータベースの構築、データの入力作業を続け、基本DBとして検索可能な形になっている。その平成十四（二〇〇二）年から科研費の補助を受けて、横浜市立大学の庄司達也氏とその教え子の協力を得て、新形式のDBへの移行を試みている。新形式DBはまだ完成に至っていないが、旧DBで検索は可能である。

（4）受け取り書簡の中に中山太郎の名前は見えないが、横山重の書簡の内容から、中山に『古代研究』が送られたことは間違いないと思われるので掲出した。

（5）大正十一年四月十一日、一ツ橋如水会館にて開催された南島談話会には、本文で紹介した新村出、金田一京助のほか、新村の師である上田万年、台湾の学術的意義を論じて、台北帝国大学の創立に尽力し、一九二八（昭和三）年に初代総長となった幣原担、後に同大学教授となる移川子之蔵、中山太郎、松本信廣らが参加していた。上田万年は後に國學院大學学長となる人物で、折口が『古代研究』を献呈していないとは考えにくい。資料が受け取り書簡であることから、上田からの礼状がない以上、ここでは保留しておくしかない。

（6）さらに、このことの傍証として、この「古代研究」以前に折口信夫が国語学、言語学に関して、当該言語学者のどのような書籍を所蔵していたかについて調べてみる。ほぼ九八％完成している「折口信夫旧蔵図書データベース」で検索してみると、上田万年については『言語学』上下（一八九八・一九〇七刊・金沢庄三郎との共編）『大日本国語辞典』全四巻（金港堂・一九一五）『日本外来語辞典』（三省堂・一九一五）、『国語学の十講』（通俗大学会・一九一六）『舞の本』（富山房・一九二六）『近松語彙』（富山房・一九三〇）などの所蔵がある。また新村出については『文禄旧釈伊曾保物語』（開成館・一九一一）『琉球記』（改造社・一九三〇）『東亜語原誌』（岡書院・一九三〇）など八点、高野辰之に関しては『近松門左衛門全集』（春陽堂・一九二四）、『日本民謡の研究』（春秋社・一九二四）『日本歌謡史』（春秋社・一九二八）『評釈名曲選』（富山房・一九二六）など、国語学に関わって演劇・歌謡関係も含め二八点、北里蘭は、『日本古代語音組織考解説』（啓公社・一九二六）『日本語の根本的研究』（紫苑会・一九三〇）といったように、多くの書籍を所蔵していた。

（7）『日本近代文学大系　四六　折口信夫集』（角川書店、一九七二）解説。

【追記】本稿は、二〇二一年一月三十一日（日）に行われた「三研究グループ合同公開勉強会」（オンライン）で発表した内容に加筆修正を加えたものである。なお、本稿は二〇二〇年度科学研究費補助金基盤C（「折口信夫旧蔵資料の分析・評価とその成果活用による同時代文学の資料学的研究」（課題番号＝18K00342）の研究成果である。

表① ：『古代研究』献呈に関わる受け取り書簡一覧

		受取年	消印日付	差出人	内容
953		昭和04年	4月5日	横山重	「あゝ横山から…番が来てゐるが…」と西村さんと川合さんに云うだけ云って見てくれとたのみました。「古代研究」のこと。どうぞ先生、九日正午に高橋さんの方へ御出かけ願い上げます。
1005			4月20日	吉原博口	古代研究によせて…近況など。
1008			4月21日	柳瀬福市	「古代研究」恵与御礼。
1009			4月21日	金田一京助	「古代研究」恵与御礼。一文をよせよとの注文です。かけるかどうか。
1010			4月21日	土師東人	「古代研究」恵与御礼。
1011			4月22日	滝川正次郎	「古代研究」恵与御礼。
1012			4月22日	土岐善麿	「古代研究」恵与御礼。
1013			4月22日	小林秀雄	「古代研究」恵与御礼。
1014			4月22日	伊波普猷	「古代研究」恵与御礼。
1015	別藏		4月22日	柳田国男	「古代研究」恵与御礼。
1018			4月23日	宮本勢助	古代研究御礼。
1019			4月23日	宮地直一	古代研究御礼。
1020			4月23日	沢本四方吉	古代研究御礼。
1021			4月23日	岩橋小弥太	古代研究御礼。
1022			4月23日	波多郁太郎	古代研究御礼。お手伝いを申し出て何の御役にも立てず…索引の方までやらせて頂き…。
1024			4月24日	高野辰之	古代研究御礼。
1025			4月24日	三浦周行	古代研究御礼。
1027			4月24日	金沢庄三郎	先日は種々御手数相かけ…古代研究御礼。研究室助手其他の件よろしく御取計り置被下…。
1028			4月24日	北里闌	古代研究御礼。
1029			4月24日	石田幹之助	古代研究御礼。
1030			4月24日	小林澄見	古代研究御礼。
1032			4月24日	松岡静雄	古代研究御礼。
1034			4月24日	秋岡安治	古代研究御礼。
1035			4月24日	高柳谷三	古代研究御礼。
1036			4月24日	折口和夫	古代研究御礼。
1037			4月24日	胡桃沢勘内	古代研究御礼。
1038			4月24日	山田孝雄	古代研究御礼。
1039			4月24日	新村出	古代研究御礼。
1042			4月25日	室生犀星	古代研究ありがたく…。
1043			4月25日	三浦忠太郎	古代研究御礼。その他。
1044			4月25日	栃内輝美	古代研究御礼。
1045			4月25日	入田整三	古代研究御礼。
1048			4月26日	和辻哲郎	古代研究御礼。
1049			4月26日	岡村要蔵	古代研究御礼。
1052		昭和04年	4月27日	林毅陸	古代研究御礼。
1053			4月27日	坂倉早造	古代研究御礼。

1054			4月27日	人生創造社	古代研究御礼。御著の広告を本誌に一頁無料にて掲載することにいたしました。
			4月27日	横山重	徐々に発送してゐます。朝日・中山さん、日日・金田一さん、
1058			4月29日	□□源三	古代研究御礼。
1059			4月29日	久松潜一	古代研究御礼。
1064			4月30日	津田左右吉	古代研究御礼。
			4月30日	折口エイ	古代研究に関する感想
1065			4月30日	高橋誠一郎	古代研究御礼。
1072			5月1日	島袋源一郎	古代研究御恵贈御礼。
1073			5月1日	河野省三	古代研究御恵贈御礼。
			5月1日	尾崎久彌	御本一昨日頂きました。・・・名古屋新聞に出します。
1074			5月1日	澤潟久孝	古代研究御恵贈御礼。
1075			5月1日	土田杏村	古代研究御恵贈御礼。その他。
1076			5月1日	幣原坦	古代研究御恵贈御礼。
1077			5月2日	安藤正次	古代研究御恵贈御礼。
1078			5月2日	石川岩吉	古代研究御恵贈御礼。
1080			5月2日	宇野圓空	古代研究御恵贈御礼。
1081			5月3日	渋沢敬三	「古代研究」御恵贈御礼。
1083			5月4日	橋本進吉	「古代研究」御恵贈御礼。
1087			5月5日	井上直弘	去る四月より表記の家に居を足め…女子医専に国文を教授…古代研究食指動きも何分薄給。
1091			5月6日	神崎一作	「古代研究」御礼。
1092			5月7日	岩松文弥	「古代研究」御礼。
1093			5月7日	川平朝令	「古代研究」御礼。
1095			5月9日	高安周吉	古代研究上梓御慶び。
1101			5月13日	山本実彦	古代研究
1103			5月14日	岩松文弥	古代研究拝読。
1113			5月20日	大阪朝日文庫係	「古代研究」御寄贈御礼。
1124			5月28日	伊波普猷	古代研究贈恵御礼。
1138			6月4日	高野辰之	古代研究恵贈御礼。
1143			6月6日	大道弘雄	父久之五十日祭の挨拶。至急原稿（古代研究紹介）おくれ。
1154			6月11日	滝川政次郎	「古代研究」贈与御礼。
			6月12日	早川孝太郎	御著書ご恵贈に預り・・
1162			6月13日	岡本佐氐雄	古代研究恵贈御礼。
1165			6月14日	岡村要蔵	古代研究恵贈御礼。
1170			6月16日 （15日）	山田孝雄	古代研究恵贈御礼。
1174			6月17日	岩橋小弥太	古代研究恵贈御礼。
1178			6月18日	移川子	「古代研究」御礼。
1182			6月19日	安藤正次	「古代研究」御礼。
1184			6月20日	幣原坦	「古代研究」御礼。

1189		昭和04年	6月21日	三浦周行	「古代研究」恵贈御礼。
1198			6月24日	松岡静雄	「古代研究」御礼。
1229			7月7日	斉藤茂吉	古代研究御礼。
1259					過日は車中ゆゆくりなく御目にかゝり…古代研究恵写御礼。
		昭和05年	6月24日	服部宇之吉	大著正に拝受仕候
1744			6月24日	石田幹之助	古代研究民族篇ノ第二冊恵贈御礼。
1745			6月24日	岩橋小弥太	古代研究民族篇ノ第二冊恵贈御礼。
			6月25日	横山重	全部発送済みました。なお心付けのものは…
			6月25日	折口エイ	御書物頂きまして
1749			6月26日	室生犀星	古代研究御礼。
1750			6月26日	高野辰之	古代研究御礼。
1751			6月26日	●●●●	古代研究御礼。
1752			6月26日	土岐善麿	古代研究御礼。
1753			6月27日	林五助	古代研究恵贈御礼。
	別蔵		6月29日	柳田国男	古代研究民族学篇第二に対する感想
1757			6月29日	久松潜一	古代研究御礼。
1764			7月2日	日夏耿乃介	古代研究御礼…。
1769			7月11日	三浦周行	古代研究御礼。
1778			7月16日	土田杏村	古代研究恵贈御礼。
1783			7月19日	佐藤孝輔	古代研究寄贈（宮城県石越図書館）依頼。
			8月9日	澤潟久孝	恵贈御礼
			8月9日	横山重	大阪朝日に島津さん、時事新報に金田一さん、読売に小泉さんの批評が載りました
1851			9月8日	新村出	八月二日拙稿の件及び同日午後諸賢と共に…事並拝承承仕候八月一日夕田園調布九〇一号過日は　古代研究御礼。
1872			9月23日	●●	古代研究御礼。
1883			9月30日	松本信廣	古代研究御礼。
2290		昭和06年	6月25日	大岡山書店	「古代研究」郵便物受領書。
2828		昭和07年	12月4日	紀平正美	古代研究恵贈御礼。

□印は判読不明。●印は封筒散逸のため差し出し人不明。

表②：折口信夫　「春のことぶれ」　郵便受領書による個人献呈先

ＮＯ	郵便物受領証					
	受付番号	種別もしくは数量	料金	受取人氏名	引受日	引受局
1	六四八号	三〇〇匁	十二銭	三矢夏井	5.2.5	神田駿河台局
2	九	〃		羽田清光	5.2.5	神田駿河台局
3	六五〇			安藤英方	5.2.5	神田駿河台局
4	一			久松潜一	5.2.5	神田駿河台局
5	二			林　五助	5.2.5	神田駿河台局
6	六四〇	三〇〇	二七	西田直二郎	5.2.5	神田駿河台局
7	一	〃	〃	大月隆仗	5.2.5	神田駿河台局
8	二		十二	柳瀬福市	5.2.5	神田駿河台局
9	三			杉浦翠子	5.2.5	神田駿河台局
10	四			高柳光壽	5.2.5	神田駿河台局
11	五			岩橋小弥太	5.2.5	神田駿河台局
12	六			吉井　勇	5.2.5	神田駿河台局
13	七			下村海南	5.2.5	神田駿河台局
14	六三二	三〇〇	二七	永瀬七三郎	5.2.5	神田駿河台局
15	三			中村憲吉	5.2.5	神田駿河台局
16	四			澤木四方吉	5.2.5	神田駿河台局
17	五			梶谷　馨	5.2.5	神田駿河台局
18	六			氷室昭長	5.2.5	神田駿河台局
19	七			土田杏村	5.2.5	神田駿河台局
20	八			川田　順	5.2.5	神田駿河台局
21	九			吉井太郎	5.2.5	神田駿河台局
22	七七九	240	12	土屋文明	5.1.27	東京大井町
23	七八〇	240	27	前田洋三	5.1.27	東京大井町
24	七八一	240	12	中山太郎	5.1.27	東京大井町
25	七八二	250	12	齋藤茂吉	5.1.27	東京大井町
26	七八三	240	12	土岐善麿	5.1.27	東京大井町
27	七八四	240	12	山本実彦	5.1.27	東京大井町
28	七八五	240	12	小島政二郎	5.1.27	東京大井町
29	七八六	300	12	伊波普猷	5.1.27	東京大井町
30	七八七	240	27	吉植庄亮	5.1.27	東京大井町
31	七八八	240	27	吉村洪一	5.1.27	東京大井町
32	七八九	430	36	井原宇三郎	5.1.27	東京大井町
33	七九〇	110	18	折口ゑい	5.1.27	東京大井町
34	八七	230	27	石原　純	5.3.5	東京大井町
35	二七	250	27	牛島軍平	5.3.10	東京大井町

表③：折口信夫『春のことぶれ』
折口メモ（寄贈依頼者控）による献呈先

日付	氏名など	備考
10	五冊受入	（難波、上町、金、春、武田祐吉）
12	一冊受入	
1月12日	石田幹之助	
	岡村千秋	
	小泉　鉄	
	●	
	北原白秋	
	石丸梧平	
	早川孝太郎	
	室生犀星	
23	五冊受入レ（内一冊返却）	柳田先生、金田一、中山、伊勢
	●●譲	
	13冊受入レ	
26	発送	
	土屋文明	書留小包「5.1.27　東京大井局受」消印の受領書に対応
	吉植庄亮	
	前田夕暮	
	吉村洪一	
	齋藤茂吉	
	土岐善麿	
	北野博美	
	山本実彦	
	横山重	
	小島政二郎	
	著者	
	伊波普猷	
	日夏耿之介	
	中山太郎	

●印は判読不能

The self-authored dedications of Shinobu Orikuchi

A large amount of documents concerning Shinobu Orikuchi remain unreleased, unorganized, and undeciphered. Whilst participating in the editing of the publication "The complete works of Shinobu Orikuchi" I deciphered and arranged a number of previously unreleased documents and drafts to create a comprehensive and complete record. Following this, I undertook a 6 year research endeavor starting from 2014 with the support of the Ministry of Education, Sports, Science and Technology. Within the research process of deciphering and organizing a number of unfiled documents and drafts related to Shinobu Orikuchi, a number of facts came to light. Based on these facts, this paper examines the type of scholars to whom Orikuchi gave his first collection of papers entitled "*Kodai kenkyuu*", as well as the dedicatees of his second poem anthology "*Haru no kotobure*", to aid in a discussion of the significance of these two works.